

天馬の記

岡部耕大

④

長崎市にも友人はいる。演劇を通じての友人である。一人が川下裕司氏である。「長崎の鐘」の長崎市公演を企画して動いているところに知り合った。彼は文学座の養成所を卒業して長崎市に帰って来ている。養成所で同期の奥さまは横浜生まれだそうである。長崎と横浜。裕次郎が歌いそうな関係である。二人で劇団をやったり、長崎市の文化活

動に励んだりしている。地味に継続するのが文化活動である。

川下さんは長崎空港まで迎えに来てくれて、稲佐山や永井隆記念館、大浦天主堂を案内してくれる。どこも訪れるたびに新鮮である。夜は銅座で酒を酌み

た。松浦駅の駅前にはイチヨウの古木があつて、いつも風にざわついていた。その横の広場にサーカスがやつて来た。オート

バイの曲乗りがバイクから落ちたのには驚いた。乗る時から気が散つていた。なにかあつた顔

ない。それでいいのかもしれない。もう、毎日がおくんちみたいなものである。

長崎市の諏訪神社のおくんちはどこか厳かである。「もつてこらい」の掛け声で手拭いをばら撒く。あの手拭いは使う気がせ

というから、もしかしたら嫉妬し合っているのかもしれない。

川下さんには映画「長崎の鐘」の取材でもお世話になった。長崎市の劇団の人にはエキソチックな美人も多い。長崎市の人は海に向こうの人を「あちゃん」と親しみを込めていう。砂糖やちゃんぽんをもたらしたのもあ

賑わったたおくんち

交わす。長崎市には東京にはないつまみがある。例えば、鯨の刺し身や鯨の白身である。鯨の白身は白みそのぬた和えで食うがよい。少年時代、松浦市志佐町のおくんちで食つた味である。

昔のおくんちは華やかだつた。バナナのたたき売りや茶わん売り、綿菓子やラムネ。家にもご馳走があつた。煮しめ、茶わん蒸し、押し寿司。小遣いは50円だった。昭和天皇が崩御されて、おくんちも自粛した。

そして、今日まで昔の賑わいはずい、いまも神棚に飾つてある。神棚には志佐のおくんちの淀姫神社の破魔矢も飾つてある。暮れと新年にお参りする深大寺の神社のお札も飾つてあるから、我が家の神棚は大賑わいである。神様はこの神様も嫉妬深い

「くる髪の干すじの髪のみだれ髪 かつおもひみだれおもいみだるる」(与謝野晶子)

(松浦市出身)